

## 子どものスポーツ集団における「あこがれ」の形成過程

清水, 一巳  
九州大学大学院博士後期課程2年

<https://doi.org/10.15017/3683>

---

出版情報：飛梅論集. 5, pp.89-103, 2005-03-18. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース  
バージョン：  
権利関係：



# 子どものスポーツ集団における「あこがれ」の形成過程

清 水 一 巳\*

## 1. はじめに

本稿では、子どもの存在を大人（社会）との連続線上に位置づけ、子どもとその周辺における社会関係へ焦点化し、その中で生成される「あこがれ」という心的経験のもつ社会性の側面について考察をおこなう。そのことで、社会化過程における、子ども自身の側からの関係性を描き出す視点として、「あこがれ」という概念を位置づけることができると考える。山本<sup>1)</sup>は少年期におけるスポーツ的社会化研究のレビューを行い、その課題としてSocializeeの側に立ったアプローチを挙げている。そして、子どもの視点に立つ意味を、子どもを現実体として客体化し、大人スポーツとの相互連関を考えることである、としている。本稿では、その方向性を取り、「あこがれ」という心的現象のもつ社会性を、スポーツ集団という社会関係との関わりから明らかにすることを目的とする。

「あこがれ」という経験は、一般的に心理的あるいは主観的次元へと還元され論じられるものであり、これを社会学的に分析することに対する疑問が出てくる。さらに、子どもの「遊び」と「スポーツ」、そして「あこがれ」の経験がどのように関連してくるのか文化的次元に位置づけられる前者二つと、心的現象である「あこがれ」がどのような連関を持つのかという疑問が出てくると考えられる。

そこで本稿では第一に、「あこがれ」を社会学的に分析する意味を、「志向性」という概念を拠り所とし、提示していく。第二に、遊びとスポーツそれぞれの文化的連関と、そこでの社会関係を間主観性論から捉えていく。そのことにより、最終的に、以上の論旨から得られた知見から、「あこがれ」の分析による、子どもの中に形成される社会性の位相について論じる。

## 2. 研究の視点

これまで、子どもとスポーツとの関わりにおける社会化研究の視点としてG.S.ケニヨンやB. D. マクファーソンらによる社会的役割-社会体系論はスポーツへの社会化、スポーツによる社会化といった視点の科学的発展に寄与してきた（1960年代後半）。J. W. ロイ, JrとA. G. インガムの社会化の定義<sup>2)</sup>に見られるようにそこでの焦点は社会化の社会の側面からのものであった。これらの視点の社会化論に対して、社会学における社会化研究の流れとの関連から、社会体系とパーソナリティ

---

\*九州大学大学院博士後期課程2年

体系とが相互作用する対等な主体であると捉えなおす必要があるという指摘<sup>3)</sup>がなされている(1980年代)。その後、岡田ら<sup>4)</sup>によりsocializeeの主体性の理論的包摂に関する考察がなされ、socializeeの側からの社会化論の理論化の可能性が示された。このようなスポーツ的社会化の研究視点の移行について、山本<sup>5)</sup>は「社会的役割—社会体系論はスポーツ役割を獲得する過程を客体化し、そこに流れる原則を見い出そうとするもの」であり「現象下にある法則を見い出したり、諸問題を解決する方策を見い出す研究においては、両スポーツ社会(大人—子ども)の相互連関的視座を持つ社会化論」が有効な方向であるという指摘を行っている。

つまり、このような視点(社会的役割—社会体系論)の下には「主観—客観」といった二元論があり、社会はそのどちらの側においても客体として捉えられることになる。そこでは、社会的現実が個人の思考に還元されたり、抽象化されたりすることにより社会的世界への十分な接近がなされなくなる。さらに言うと、恣意的な「教育」が自明的なものとなされ、その絶対性が保証されることになる。

そこで、本論では、「社会を諸主体を結びつけ、諸主体が所属する場(fabric)<sup>6)</sup>」としてとらえ、間主観的な場とする視点を取り上げる。そのことで、子どもの発達(社会化)という現象を、子どもの世界という特殊な世界における間主観性が大人の世界と交叉することによる、新たな間主観性の達成として捉えることができるからである。

スポーツという文化活動は、この点において重要な示唆を与えてくれるのではないだろうか。ホイジンガ<sup>7)</sup>が言うように、文化は遊びの形式の中に成立したこと、文化は原初から遊ばれるものであったということからも、文化的活動(スポーツ)と遊びの結びつきへ焦点を当てることは自然なことである。しかし、同時にスポーツの直面する社会的問題も存在する。それは、スポーツの高度化にともなう遊びの喪失である。「組織化と訓練が絶えまなく強化されてゆくとともに、長いあいだには純粋な遊びの内容がそこから失われているのである。……こうして現代社会では、スポーツがしだいに純粋の遊びの領域から遠去かって<sup>8)</sup>」ゆくというのである。この傾向は子どものスポーツ集団にも大きな影響を与えている。子どもの集団とはいえ、スポーツ集団として組織化されるところには、大人の存在があり、大人の基準が用いられることになるからである。

現在の子どものスポーツ集団における大人の参与形態は、管理・運営、指導という面におけるものが主であるが、新たな形態も模索され始めている。それが総合型地域スポーツクラブといわれるものである。それは、多様なスポーツ種目を多世代のスポーツ集団が活動基盤を共にするというクラブ形態を目指し設立されているものであり、そこにはスポーツクラブという活動基盤を通して、多様な種目を愛好している人々、多様な世代の人々の交流を行う場が形成されることになる。そして、これまでの子どものスポーツ集団では、成員(子ども)は管理者、指導者としての大人との接点のみだったのに加え、プレーヤー・愛好者としての大人との接点を得るという可能性を考えることができる。つまり、社会的役割としての大人—子ども関係ではなく、スポーツ活動を中心にした大人と子どもの同心円的な関係というものをそこに仮定することができる。

そして、子どもの世界に対応する〈遊び〉から大人の世界(社会的世界)に対応する〈組織ス

スポーツへの移行において、それらの交叉をもたらす媒介としてスポーツ活動を捉えることにより、そこでの教育的関係を教育の自明性による教え込みに還元することなく捉え、説明することができる。もちろんそこには、間主観性の達成を可能とする集団であるという前提があり、その是非を実証的に検証する必要があるが、本論においては、そのための視点を提示することを目的とし、子どものスポーツ集団における関係性の形成過程に焦点をあて論考を進めていく。

### 3. 「あこがれ」という社会学的視点の可能性

#### (1) 「あこがれ」という関係性の構造

「あこがれる」とは、「あくがる」から転じ (1)理想とするものに強く心がひかれる、(2) (ある物に心がひかれて) ふらふらとさまよい出る、(3)気をもむ<sup>9)</sup>、とされている。このように、「あこがれ」とは心がひかれる、気をもむというように心の状態を示す言葉であるといえる。心がひかれるというのは、ある対象が存在し、その対象に対し主体が情熱をそそいでいる状態と考えることができる。この情熱をそそぐ対象と情熱をそそぐ主体との関係について欲望論において、欲望の三角形として捉えたのがルネ・ジラルドである。『欲望の現象学』の冒頭でドン・キホーテが騎士道の鑑としてのアマデウス・デ・ガウラについて語っている一文について次のように述べている。

「アマデウスのおかげでドン・キホーテは、個人の基本的権利を放棄した。彼はもはや自己の欲望の対象を選びはしない。彼にかわってそれを選ぶべき者はアマデウスである。アマデウスの信奉者は、全騎士道の鑑(モデル)が自分に指し示す、あるいは自分に指し示すと思える対象にむかって突進するのだ<sup>10)</sup>」

通常、欲望について説明されるとき、その対象の本質がとりあげられるが、それが十分でないとき情熱をそそぐ主体に目を向けられ、主体の心理学へと向うことになる。そこでは、主体と対象の単純な直線が存在するのみである。しかし、ジラルドは「それは本質的なものではなく、一見直線的に見える欲望の上には、主体と対象に同時に光を放射している媒体が存在する<sup>11)</sup>」というのである。つまり、欲望する主体は欲望される対象に直接向うのではなく、なんらかの媒体に準拠することにより主体に欲望が発生するのである。では、あこがれの現象をこの三角形図式に当てはめるとどのように考えられるのか。ドン・キホーテの例で言うと、ドン・キホーテはアマデウスにあこがれることにより、アマデウスを騎士道の手本とし、それが指し示す対象に向かう。つまり、ドン・キホーテのあこがれの対象はアマデウスであり、そのことにより、アマデウスの欲望する対象(騎士道の極致)を欲望しているということになる。

ここで、「あこがれ」という現象は、①あこがれの対象との関係性の上に発現する。②その対象への解釈に基づき、あこがれの対象が欲望するもの(欲望の対象)をも含んだ概念であるという規定をすることができる。

また、ジラルドは欲望の主体と媒体との間の距離についても言及している。

「媒介作用が、媒体の欲望と完全に瓜二つの第二の欲望を生み出すのだ。このことは常に競合する二つの欲望と関わり合うということである。こうなるともはや媒体は、主体に対する手本といった役割を果たすだけではおさまらず、それと等しく障害物としての役割を演ずる、あるいは演ずるように見えることになる。<sup>12)</sup>」

このような競合する二つの欲望の関わり合いに影響を及ぼすものとして、欲望の三角形における欲望する主体と媒体との間の距離を挙げている。これらの間の距離が離れている場合の媒体の作用を外的媒介と呼び、そこでの主体は「自己の欲望の真実の性格を声高に公表してはばからない。公然と自分の手本を崇め尊び、自分がその弟子であると断言する<sup>13)</sup>」のである。そして、距離が縮小し、それぞれの領域が重なり合う場合を内的媒介と呼ぶ。そこでの主体は「模倣しようという意図を自慢するどころか、それをひたかくしに隠す<sup>14)</sup>」ことになる。また、スタンダードは、現代的感情と呼ぶ普遍的な虚栄心の果実、すなわち《羨望、嫉妬、無力な憎しみ》にたいして読者たちに警告するように忠告していると指摘し、この現代的感情があらゆる所にいきわたっているとすれば、それは人間間の差異が次第次第に縮小しつつあるこの世界では、内的媒介が支配的になっているからである<sup>15)</sup>、と述べている。これは、社会の近代化に伴い平等化が進み、欲望の主体と媒体との距離が縮小したことにより、周囲に対して差異を求めて模索する人々が大勢現れていることにもつながっている。

すでに、「あこがれ」は欲望の対象を含むものであると規定しているが、さらに、③あこがれる主体と対象との距離により欲望の対象の位相に違いが現れるということをつけ加えることができる。

スポーツの世界においてもこのことはあてはまるだろう。近代化されたスポーツにおいては、統一されたルールにより欲望の主体と媒体との平等化が図られるが、欲望の対象の獲得により示される個々の能力の差により隔てられることになるのである。特にスポーツの商業化と関連して欲望の対象が経済的对象へと移行することにより、現代的感情の広がり促進につながっている。このような視点をとると、学校運動部などの閉鎖的スポーツ集団における問題行動、いじめやしごきというも習慣や伝統といった説明ではなく、近代スポーツの問題として取りだすことができるのではないだろうか。

このように近代化されたスポーツの中では、現代的感情がいきわたっていることは事実であるが、同時に、そこには身体を通じた技術・能力といったものにより差異化された世界が存在する。ドン・キホーテにとってのアマデュースのように外的媒介として、一流とされるアスリートの存在がある。先のアテネ・オリンピック男子平泳ぎ100mで優勝した北島康介の感想が印象的である「気持ちいい、ちょー気持ちいい」というものである。これは優勝したうれしさの表現というより自らの最高のパフォーマンスを発揮したことに対する感覚の表現であると見ることができるのではないだろうか。オリンピックという社会的・経済的に価値があるとされる大会での優勝であることも影響しているかもしれないが、ゴール直後、そして、「気持ちいい」という身体的感覚を表現することばであるため、《より速く泳ぐ》ことを達成したことに対するものであると解釈するほうが自然

である。つまり、そこでの彼の中には優勝という結果より、より速く泳いだという達成感のほうが多くの割合を占めているといえる。そして、このとき技術・能力といったもので差異化されたスポーツの世界において信仰的に模倣される手本として位置づけられることになる。

このように、スポーツの世界への視点は、前者の例にあてはまる「制度化されたスポーツ」と後者にあてはまる「ゲーム事象としてのスポーツ」の二つの側面に大別することができる<sup>16)</sup>。それらの、どちらの側面に重点を置き、スポーツとかわりを持つようになるのかは、個々の社会的状況や経験に大きく影響されるが、そこに「あこがれ」の対象が大きな存在感を示すことになる。

以上、欲望の三角形図式との対応から「あこがれ」についてみてきた。ここで、「あこがれ」という心的現象の外枠について整理すると、①あこがれの対象との関係性の上に発現し、②その対象への解釈に基づき、あこがれの対象が欲望するもの（欲望の対象）をも含んだ概念である。そして、③あこがれる主体と対象との距離により欲望の対象の位相に違いが現れるものである、という捉え方ができる。「あこがれ」とはその対象の欲望するものをも含む概念である、このことが意味するのは、あこがれの対象の欲望対象が、あこがれるということにより、主体の側に形成されるということでもある。そこには欲望というなにものかへの願望、つまり、「なにものかへの」という意識の方向性が存在する。この方向性は志向性として捉えることができる。では、この志向性という概念は、伝達、移譲あるいは再形成するということが可能な概念であるのか。次に、志向性概念についての概観を行い、「あこがれ」の現象との関わりについて検討していくことにする。

## (2) 「あこがれ」の中での志向性の形成

ここでは、「あこがれ」、「あこがれる」という心の現象がもつ作用とその方向性について、志向性という概念を掘りどころに検討していく。それは、「あこがれ」る主体に対して対象が存在し、その対象のもつ意識の方向性（欲望）に主体の側も影響を受けるという理由からである。つまり、……に向けられる意識、ある対象や内容に向う性質である志向性の位相における作用があると考えられるためである。「あこがれ」の特性へと接近するためにも、まずこの現象学を中心とした概念である志向性について概観し、本稿での捉え方を提示する必要がある。

志向性概念を現象学の中心概念においたフッサールは、志向性という概念によって、「理論的知識の基盤としての「生きられた経験」の具体性のなかにも、知としての基本構造が備わっており、一切の知識の基準となる批判的機能が働いている<sup>17)</sup>」ことを表している。そして、方位性（～に向けられていること）、思念的規定作用、さらに志向されたものを直感において把握しようとする作用という三つの特性がある。この志向性を構成する三つの特性は信念、意味、直感<sup>18)</sup>という概念で表される。「あこがれ」とは、あこがれる対象とその対象の望むもの（欲望）も含む概念であると上述した。つまり、「あこがれ」の中における、あこがれの対象にむけられる意識（志向性）とあこがれの対象にある志向性という二つの側面に対して、さらには、あこがれの主体の側に形成される欲望の対象への志向性という3つの側面における志向性（信念、意味、直感）の関連についての詳細な記述が必要になってくるということである。

志向性について「世界内の対象や事象に向けられ、あるいはそれらに関わり、あるいはそれらについて生じるような多くの心的な状態ないし出来事<sup>19)</sup>」と規定したのはサールである。そこでは、志向性とは心的な状態という主体内に形成されるものであるが、それは対象や事象に向けられているものであり、常に関係性の中に生じるものなのである。

また、サールは志向性と「発話」による意味行為において、志向的状态の所有から慣習的に実現される発語内行為の遂行に至る段階を、第一に、自分が志向的状态をもつことを他人に知らせることを目的として、志向的状态を意識的に表明すること。第二に、発語内行為の標準的な非言語的目標を達成する目的で、この表明行為を遂行すること、そして第三に、さまざまな発語媒介目標に対応する発語内行為の主眼点を慣習化する、慣習の手続きの導入<sup>20)</sup>、としている。

このように考えると、社会化論での解釈的アプローチにおける、状況定義の交換や間主観的なコミュニケーションが社会的リアリティを生み出すという視点へと通じているということができる。さらに、バーンステインにより用いられた「意味の社会的構造化」をもたらす規制・調整原理としてシンボリックな性格をもつ社会言語コードという用語は、その志向的側面に重要な意味があると思われる。そこでは文化伝達として社会化が捉えられており、コミュニケーションの重層性、社会構造・階級と文化の重層性を解き明かすのに貢献している。

さらに、サールは「同じひとつの事象が意図的行為であると同時に非意図的行為でもありうることの意味は、言語的な表象にではなくむしろ志向的な提示に本質的な関連がある<sup>21)</sup>」と指摘する。例えば、ある相互行為においては、それが意図されたと同時に行為対象に対する志向性もまた、そこで提示されているといえるのである。

例えば、教師が子どもに対して叱るという相互行為を捉える場合においても、志向性への視点を取り入れることにより、その行為の表象的な充足だけではなく、非意図的行為の充足についても記述することが可能になるのではないだろうか。子どもが叱られた教師に対し、疎ましく思ったり、感謝の気持ちを持ったり、そこで伝達される意味はさまざまであるが、教師は子どもに対して規範を伝達する存在であるという、大人の子どもの対する志向性が提示されているということができる。

大人と子どもとの関係においては、志向性という視点を取ることで、これまで、社会的に構築されてきたと説明されてきた子どもの存在に対して、大人の意図的行為を解釈し、それにあった(反した)子ども像を形成する過程と、同時に非意図的行為により提示された志向性の形成過程という二重の層においての説明が可能になるのではないだろうか。つまり、固定的な大人(教師)役割の解釈と、大人-子ども(教師-生徒)関係の獲得である。大人の子どもの対する行為に対して、子どもは従順に従ったり、反発したりさまざまな表象的行為を行うことができる。そこでは、大人の役割(社会の構成主体としての)を解釈し、獲得することになる。それと同時に、大人と子どもとの関わり方(社会の構成主体である大人が子どもをどのように捉え、関わりをもっていこうとしているのかという方向性)について知ることになり、大人と子どもという存在を知ることになる。それは、大人と子どもとの関係の中にある志向性の獲得である。このことは、ミードらによって説明されてきた、「一般化された他者」の態度取得という説明と一致するところがある。しかし、この

ようなミードの説明は「社会的相互行為において交渉取引しあわなければならない具体的な参加者のことを語ることに成功していない<sup>22)</sup>」という指摘がなされるように、異なった相互行為の文脈が、ここでの相互行為に及ぼす影響についての配慮がなされていない。そこで、間主観的社会集団の形成と志向性の獲得という、より詳細な社会的世界が生み出される仕方の分析が重要になってくる。

#### 4. スポーツ集団における間主観性の達成

これまで、「あこがれ」の外枠についての規定を行い、さらに志向性という観点からの詳細な社会的世界が生み出される仕方への視点が挙げられた。そこでは社会を間世界的なものとして捉える間主観主義の視点が有意な示唆を与えてくれると考える。

##### (1) 組織化の現象としての間主観性

間主観性とは、「私と他者たちがともにそこに居合わせて共同的に生活している<sup>23)</sup>」という事態＝世界の自明的なあり方をさすものとされている。

ミードは間主観性の問題が社会集団の一つの問題として取り込まれる事実であるとして洞察を行っている。間主観性が社会集団内部で獲得される程度に応じて、社会集団の区別をおこない、膜翅目やシロアリのような間主観的関係のない社会集団からはじめ、その進化の最たるものとして芸術的集団と科学的集団をあげており、そこでは「創造的な個性の最大限の表現と他者による最大限の理解が実現される社会集団の現実的可能性が確信できる」としている。つまり、ミードは間主観性が社会集団の組織化の現象であると捉えているのである。この視点を取り入れることにより、遊びを主な活動とする子ども集団とスポーツ（組織スポーツ）を主な活動とする機能的集団をそれぞれ社会集団とし、その組織化の現象への視点が提起される。さらに、遊びという概念を柱とすることにより、子どもの遊び集団とスポーツ集団とのつながりをもたせることができ、それらの区分を活動内容ではなく、組織化という視点からみてとることにより、間主観性の達成の過程へと焦点化することが出来るのではないだろうか。

ミードの展開する社会集団の概念化に対しては、いくつかの批判がなされている。ミードは社会集団の解釈において、間客観的な社会集団としてスポーツの例を取り上げ記述している。ボクシングとフェンシングについて、これは犬の喧嘩と同じ状況である。もしもその個体が勝とうとするならば、攻撃と防御の大部分は考えてはならず、それは直接行わなければならない、とし有意味でない外的身振り会話であると主張している。これに対し、S.ヴァイトクスは「この状況には他者の態度の明示的な取得はないが、このことが有意味でない外的身振り会話であることを意味することではない<sup>24)</sup>」と主張する。テニスやボクシングを例にとり、両成員（プレーヤー）は、自分たちが練習試合をしているのか、親善試合をしているのか、それともプロのトーナメントをしているのかを知っているし、彼らは、得点、試合の残り時間、試合の激しさをも知っている。相手の試合における弱点に感づくるとすると、相手は弱点に感づかれたことに感づいて欠点を無くそうと努める。そのようにして、相手の側に表れてくる新しい弱点を敏感に探し出すのであるというのである。こ

ここではやはり、他者の態度の明示的な取得の有無、また、他者の考えの確定の有無に関わらず、それらの状況はすべて高度に有意味であり、間主観的であるといえる。このことはスポーツ集団における社会的関係は高度に進化したものであるということを示しているのではないだろうか。日常的経験と日常的知覚の共通世界に参加して、それを自明視している科学的集団では、「……個別特殊な例外を説明する一般普遍的な仮説を定式化し、……検証し、……そして、それが自明視された共通の科学的世界の一部として科学的共同体によって受け入れられた自分独自の研究を持つときに、個々の科学者は十分な個別特殊性のなかで自分自身を実現し、そうしながら科学的集団の全体のなかで自分自身を実現する」のであり、それは「創造的な間主観性の理想に近づく組織化の一つ」であると指摘される<sup>25)</sup>。では、科学的集団をスポーツ集団と読み替えることは可能であるのか。スポーツ集団も身体を介して日常的経験と日常的知覚の「共通世界」に参加しているといえ、それは自明視されている。上記の仮説・研究を技術・記録（結果）と読み替えることに違和感はなさそうである。今後、詳細な検討を必要とするであろうが、ここでスポーツ集団を「創造的な間主観性の理想に近づく組織化の一つ」であり、そこでは「創造的な個性の最大限の表現と他者によるその最大限の理解がなされる」という仮説を導くことができる。

もう一つ間主観性の問題に対して、示唆的なのがシュッツの間主観性論である。そこでは意識と社会的世界との関係についての問いとみなし、間主観性が社会集団の多様な次元の中にそれぞれ異なったパーソナリティの準位でかかわっている社会的人格の現象であるというみかたをする。つまり、個人の主観性はすでに社会的なものであり、それは社会的世界における根本的に異なる準位（レベル）における知の獲得と関連しているのである。この異なるレベルをシュッツは①他者の定在についての知（生活世界の根本的な構造と成層）、②他者の相在についての知（集団の相対的に自然な世界観）、③他者の行為の具体的動機についての知（社会的行為の理論）という三つに区分している。この三つの準位は行為者に対して関連性があり、その行為を遂行するときの直接的な関心や動機付けという点に関わってくるのである。「関連性の同一の領域に属していない判断基準の適用は、論理的なもしくは価値論的な（道徳的な）不調和をもたらす<sup>26)</sup>」ことになるのである。このように、間主観性を問題にするときそれぞれの準位を区別し、それぞれの準位で生起する間主観的現象を同時に扱うために展開されたのが関連性（レリバンス）理論である。S.ヴァイトクスは関連性理論を上記の知の構造との関連から検討し、以下の二つの一般的結論を引き出している。①行為者の賦課的関連性から固有内在的関連性への進展を示している。②固有内在的な関連性が行為者の動機で継続的な達成をとおして共有される一方、賦課的な根本的関連性は自明的なやり方で共有されている。これらは今後、社会集団（スポーツ集団）の多様な準位の間関係－自明的な間主観性と固有内在的な間主観性の関係－について分析を行う場合の基礎となるだろう。

## (2) 間主観性と社会化

子どもの世界は、未分化であり「想像的」な現実の中に自らを閉じ込め、それによって自分の周囲の世界から隔離される状態をつくりだしている、とみることができる。この見解から、子どもの社会化はその社会的世界での特定の場所の行事や規則や慣習を伝達するというだけでなく、同時に、子どもの心を他者や共通に共有されている世界に「開く」ことでもあるということが出来る。これの意味するところは、子どもはまさに社会的にさせられる、間主観的現実を分けもつようにさせられなければならないということなのである。

紅林<sup>27)</sup>は認知発達との関連から間主観性論の脆弱さについて指摘している。二者間の会話を取り上げ、そこでのコミュニケーションに使われる知識は否定可能性をもつことから、メタ・コミュニケーションの一つの構成要素へと格下げされるというのである。そして、そこでの知識の一般化により、その後の予期構造の構築に寄与することになる。つまり、「社会化自体が、相互行為の自明視された基盤の脆弱さを露呈させるという一見パラドキシカルな機能によって、個人の社会への依存性を高めさせ、共生社会たる現代社会の存立構造を正当化し、強化している」というのである。この指摘においては、シュッツの指摘する三つの準位への視点が抜けており、自らも「素朴な間主観性の」と言及しているようにすべての社会集団に当てはまるものではない。ミードの指摘する理想的な間主観性の達成がなされる領域においてはこの指摘は当てはまらないだろう。しかし、このような領域が近代以降の社会では、そう多くないことも事実である。

## 5. スポーツ集団における「あこがれ」への視点

これまでに得られた知見を整理すると、①「あこがれ」という心的現象は志向的性質を持ち、関係性の上に成り立つ心的現象であり、その関係性における方向性を与えるものとして捉えることができる。②その関係性における距離が志向する対象に影響を及ぼしており、また獲得する社会性の位相を決定づけている。③子どもは遊びという未分化な世界から、スポーツという社会的に構成、維持されている世界へと侵入することにより、関係性の中での存在となる。ここでは、スポーツ活動が静的ではないため体験として、いま・ここでの自他との関係を有することになる。ここでの体験が組織化される場合、大人（指導者）－子ども関係、熟練者（子ども、大人）－子ども関係という二重の関係性を形成することになる。他者との対面的行為においては、さまざまな儀礼的行為が行われていることは周知のとおりである。今・ここでの動的な対面的行為の方法も、それまで経験した社会集団の中で培われてきたものであり、同一の場においても多様な方法が認められることにつながる。しかし、スポーツという一定の活動目的の設定がなされることにより、多様な対面的行為の方法であったものが賦課的な根本的関連性へと進められていくことになる。

また、スポーツ集団には実社会とスポーツ活動、コートの中を区別する境界が存在する。ここには関係性のちがいがみられる。コートの中というスポーツの空間には、プレイという身体を媒介にした相互同調性をもたらす可能性をも含む空間であり、動的な関係性が存在する。ここでは、スポーツ空間独特の体験がもたらされることになる。

井上<sup>28)</sup>は、スポーツによる「美的体験」を芸術との比較から述べている。ホイジンガが遊びの本質に「闘争」と「表現」を挙げていることから、これら二つの相の結びつきにより、スポーツと芸術には親近性があるという。そして、スポーツには「芸術にみられるような表現的契機を欠いている」ことを認めつつ、スポーツの観客が、「スポーツ運動の美や試合の劇的特質」という形式的特徴を通して「生命力の表出」や「人格性の発露」を感得し読み取るところに「美的体験」があるという。これは、観客というスポーツをみる側における体験であるが、プレーヤーの内的経験を美学的に表現したのが哲学者の中井正一<sup>29)</sup>である。彼は「グラウンドに入った瞬間、目を射るような幾重もの白線、直線、曲線、円、楕円それらのもの前に先ず人々は緊った興奮を感ずる。この興奮は、もし人々が気付くならば、線が或は楕円が単なる物理的空間である場合とは異なったものをもつことを知るであろう。……そこでは物理的空間は単なる間隔ではなくして、それを走破し、追い抜き、到達しつくべき存在論的距離である」と、スポーツという行為に足を踏み入れるときの気分を論じている。そして、共同存在的性格として、「スポーツに於けるシートを守る、シートにつくと言うシートのもつ感じ、そのシートが他のシートとの間に存在する間合い或いは間をとるという間の気分」を挙げている。すなわち、野球における連携プレイにおいて、遊撃手が打球をさばき、二塁ベースに入った二塁手に送球し、それをすばやく一塁に送り、ダブル・プレーを成立させる時などにみられるものである。ここで、遊撃手と二塁手との間には、見えない糸でつながれたような一種の同調関係があるといえる。それぞれの野手はボールの送り手、或は受け手の動作を自己の身体に創り出し、それに合うように自らの動作を顕在化させているのである。この同調や間合いの如何によってプレイの成否を分けることになる。さらに、このような間合いはチーム全体としても成立していることが重要で、その際にチーム全体が「集团的実在的性格」をもつように思わせる。この間合いの緊密さと微妙さを高める為に練習が繰り返されるのである。そして、そのようなときに「没入」という経験はなされる。チクセントミハイ<sup>30)</sup>は行為の課題とその人の能力がつりあったとき、活動の結果よりも活動そのものに熱中し、自我と環境、意識と行動のあいだに区別がなくなり、人間は自我忘却に身をゆだねると述べ、このような経験を「フロー」という概念によって「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉」として捉えている。このような経験について、先の中井は「『異なった時間の同一の今』が、即ち流れない時がそこに只拡がって行く」のであり、それは「愈々不断の瞬間の持続である」と言い、それが「真のスポーツ気分」である、としている。現代のスポーツの世界においても、そのような体験をしている人々を目にすることができる。高校野球において、勝ったチームの選手のみならず負けたチームの選手、さらには応援という形で場をともにした人々までもが泣いている場面をよくみかける。そこでは、上記にみるような至高的な体験をしていると見ることができる。その結果として、勝敗に関わらず泣きたくなる気分<sup>31)</sup>がもたらされることになるのである。

このような体験が少なからずとも、現代のスポーツ集団においても繰り返されているということは事実である。そして、スポーツ特有の体験をもたらすためには、中井の言う空間性のみならず、時間性というものが非常に大きな影響をもたらすことになる。つまり、「同じ釜の飯<sup>32)</sup>」というこ

とばで表されるような集団の形成には、体験の経年的共有が必要とされるのである。

現代の共有する空間、時間の減少した社会においても、スポーツに関わりを持つようとする人々は増加傾向にある。それが、「する」スポーツから「みる」スポーツへ、さらには「ささえる」スポーツへ<sup>33)</sup>といった関わり方の変容にも現れているのではないだろうか。このような多様化したスポーツとのかかわりの中で、「美的体験」や「真のスポーツ気分」、「泣きたくなる気分」が共有されつづけるという事象に共通の社会的関係が存在するとみることができる。そして、そのスポーツ事象に関わる「あこがれ」とその形成過程を明らかにすることは、子どもの主体的側面からの社会化研究として位置づけることができるのではないだろうか。

また、「あこがれ」における対象との距離の違いは、所属する集団における間主観性の達成と関連が見られ、間主観性の達成の位相には他者の定在、相在、行為の具体的動機についての知の獲得が関連しているとされた。この知の位相とあこがれの対象との距離とが相関関係にあると考えると、あこがれの形成にともない形成される主体の志向性は、その社会集団の間主観性の達成の進度により影響をうけることになるという仮説を得ることができる。

つまり、このコートの中の空間において形成される「あこがれ」というものはスポーツのプレイの世界における対象を媒介にしたものであり、あこがれの主体の中にはスポーツへの志向性が形成されることになるのである。

## 6. おわりに

これまで、「あこがれ」という概念の外枠、作用について志向性との関連から考察を行い、そして、社会集団の捉え方として間主観性概念を参考にスポーツ集団への視点について検討してきた。それらを整理すると、以下ようになる。

- ① 「あこがれ」は、その対象との関係性の上に発現し、その対象への解釈に基づくあこがれの対象が欲望するもの（欲望の対象）をも含んだ概念である。そして、あこがれる主体と対象との距離により欲望の対象の位相に違いが現れてくる。
- ② 「あこがれ」の中には、(1)あこがれの対象にむけられる意識（志向性）、(2)あこがれの対象にある欲望対象への志向性、そして、(3)あこがれの主体の側に形成される欲望対象への志向性という3つの側面がある。そして、それぞれの志向性の構成要因（信念、意味、直感）の連関について明らかにする必要がある。
- ③ 間主観的視点をとることにより、遊びを主な活動とする子ども集団とスポーツ（組織スポーツ）を主な活動とする機能的集団をそれぞれ社会集団とし、その組織化の現象への視点が提起される。そこでは、スポーツ集団は「創造的な間主観性の理想に近づく組織化の一つであり、そこでは創造的な個性の最大限の表現と他者によるその最大限の理解がなされる」という仮説が導かれる。
- ④ 「あこがれ」における対象との距離の違いは、所属する集団における間主観性の達成と関連しており、間主観性の達成の位相には他者の定在、相在、行為の具体的動機についての知の

獲得が関連している。これにより、あこがれるという心的現象により形成される主体の志向性は、その社会集団における間主観性の達成の進度により影響をうける。

「スポーツ的」体験を意図的に構成することは困難であり、また、意図的に行った場合それはすでに体験の意味を失っているといえる。しかし、その方向性を与えることに対しては可能性を見出すことができるのではないだろうか。それが、「あこがれ」の形成であり、そのことによるスポーツの世界への志向性の形成である。特に子どものスポーツ世界との関わりにおいては、どのような体験をとおして「あこがれ」が形成されているのかということだけでなく、あこがれの対象との距離および、集団における他者（あこがれの対象）認識の位相、との関連、さらには他の社会集団との比較をとおして「あこがれ」の形成過程について説明を行うことにより、そこでの関係における教育的意味を相対化することへと繋がるのではないだろうか。そのためにも、現在の子どものスポーツ世界とそれを取り巻く社会的世界との関連において、本稿において得られた知見をもとに、提起された仮説を実証することをとおして、「あこがれ」の形成過程について明らかにすることが、今後の課題とされる。

#### 〈注〉

- (1) 山本は、北米および日本における子どものスポーツに関する社会化研究についてレビューしており、それらはいずれも社会学領域での社会化論を反映したものであり、こどものスポーツを厳密に客体化していなかったとのべており、子どもの視点によるスポーツへのアプローチが必要になると指摘している。  
山本清洋 1987、「子どもスポーツに関する社会化研究の現状と課題」、  
体育・スポーツ社会学研究会編、『体育・スポーツ社会学研究』6、道和書院 pp.27-49
- (2) 「社会化を、人が社会的アイデンティティを獲得し、適切な役割行動を学び、一般に彼が属し、あるいは所属しようと望む社会システムの成員によって抱かれた期待に適合する相互作用のプロセスとして定義する」  
J. W. ロイ, Jr/A. G. インガム「子どもと青少年の心理－社会的発達におけるプレイ、ゲーム、スポーツ」、J. W. ロイ, Jr/J. S. ケニヨン/B. D. マクファーソン編著 糸野豊編訳、1988、  
『スポーツと文化・社会』ベースボール・マガジン社 pp.289-330
- (3) 三本松正敏 1981、「スポーツ社会学における“社会化”研究の展開と課題」、福岡教育大学紀要、第31号第5分冊、pp.139-149
- (4) 岡田猛、山本教人 1984、「スポーツと社会化論についての一考察－Social AgentとSocializeeの相互作用の観点から－」、体育・スポーツ社会学研究会編、『体育・スポーツ社会学研究3』、道和書院 pp.79-95
- (5) 山本清洋 1987、前掲書
- (6) 「社会を、間主観的实践、行為と相互行為、そしてこうした過程の中に動員される制度化され

共有化された実践的資源と物質的資源、これらからなる極相」と位置づける視点である。

ニック・クロスリー 西原和久訳、2003、間主観性と公共性、新泉社 p.140

(7) ホイジンガ 高橋英夫訳、1988、ホモ・ルーデンス、中央公論社

(8) 同上 p.399

(9) 松村明編 1999、大辞林第2版、三省堂

(10) ルネ・ジラルル 古田幸男訳、2004、欲望の現象学、法政大学出版局 p.2

(11) 同上

(12) 同上 p.8

(13) 同上 p.10

(14) 同上 p.11

(15) 同上 p.15

(16) J. W. ロイ, Jrは現代社会において多義的な意味をもつスポーツの概念は極めて曖昧であり、その本質を捉えるためには、多元的な概念規定からのアプローチが必要である、と指摘し、「ゲーム事象としてのスポーツ」、「制度化されたゲームとしてのスポーツ」、「社会的制度としてのスポーツ」、および「社会的状況としてのスポーツ」の4つの視点を取っている。しかし、本稿ではスポーツ事象と社会的世界を区別するにとどまるため「制度化されたスポーツ」、「ゲーム事象としてのスポーツ」の区別とした。

J. W. ロイ, Jr 「スポーツの本性 概念規定への試み」、J. W. ロイ, Jr / J. S. ケニヨン / B. D. マクファーソン編著 糸野豊編訳、1988、『スポーツと文化・社会』ベースボール・マガジン社 pp.38-56

(17) 新田善弘「フットサルの現象学—知の解体と再構築—」、新田善弘編、2000、『フットサルを学ぶ人のために』、世界思想社 p.54

(18) 門脇俊介「生活世界、志向性、人間科学」、同上 pp.280-298

(19) ジョン・R・サール 坂本百大訳、1997、志向性—心の哲学、誠信書房 p.1

(20) 同上 pp.222-246

(21) 同上 pp.140-141

(22) ニック・クロスリー 西原和久訳 2003、前掲書、p.144

(23) 森岡清美他編 2000 新社会学辞典 有斐閣

(24) S.ヴァイトクス 西原和久他訳 1996、「間主観性」の社会学、新泉社 p.64

(25) 同上 pp.54-57

(26) 同上 p.162

(27) 紅林伸幸 1989、「社会化：間主観性と認知発達の交錯—共生社会の基盤理論」『教育社会学研究』45、pp.109-122

(28) 井上俊 2000、スポーツと芸術の社会学、世界思想社

(29) 中井正一 1962、「スポーツ気分の構造」、久野収編『中井正一 美と集団の論理』、中央公論

社 pp.172-185

- (30) チクセントミハイ M. 今村浩明訳 1979、楽しみの社会学、思索社
- (31) 松田は、このような泣きたくなる気分を至高性の世界との関連から捉え、「至高性の世界は、有用性の世界の侵犯、破壊として、社会の次元というより体験の次元にのみあるから、これを制度として定着させることは難しい」という指摘をしている。  
松田恵示 1999、「体育とスポーツ」、井上俊 亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社 p.204
- (32) 多々納は、わが国の社会集団における「同じ釜の飯」的性質とスポーツ集団の国際比較を行い、わが国だけが「特殊独特」であることによるものではないと結論付けている。さらに、その長所を生かすためには、開かれたスポーツ集団への変革が不可欠であると指摘している。  
多々納秀雄 1997、スポーツ社会学の理論と調査、誠信社
- (33) スポーツ活動の多様化とスポーツ人口の拡大に伴い、「スポーツをささえる活動」として、スポーツにおけるボランティア活動が新たにその意義と価値を認められるようになってきた。  
山口泰雄 2004、スポーツ・ボランティアへの招待、世界思想社

## Generation process of “yearning” in child sport

Kazumi SHIMIZU

This paper explains a mental experience, yearning, at child sport. Existence of a child is positioned on a continuation line with an adult (society), focusing is carried out to a child to the social relation to the circumference of it, and this paper considers the social side which the mental experience “yearning” generated in it has. The concept of “yearning” can be positioned as a viewpoint, which pictures the intentionality from the child [itself] side in socialization process with that.

The following is an outline of the results.

- 1) “Yearning” is discovered on the intentionality with the object. And it is a concept also containing the object of the desire in the object of yearning based on the interpretation to the object.
- 2) There are three sides in “yearning.”
  - (i) Consciousness turned to the object of yearning
  - (ii) Intentionality in the object of yearning
  - (iii) Intentionality to a desire which is formed in the subject side of yearningAnd it is necessary to clarify about connection of the composition factor (a belief, a meaning, intuition) of each intentionality and consciousness.
- 3) Taking an intersubjective viewpoint draws one hypothesis. In a sport group, it is one of the systematization for an approaching to the ideal of creative intersubjectivity, and there are the maximum expression of creative individuality and the others’ maximum understanding of that.
- 4) The intentionality of the subject formed of the mental phenomenon of having a yearning receives influence with the progress of achievement of the intersubjectivity in the social group.